

「愚本会」として同志相寄って故師を偲び一同哀悼の意を新たに祈つた。尚此席上松田静水師を本会顧問に推戴が決定した。

旭昇 五月二十七日午前十一時 春季大演奏会 時神戸兵庫公会堂、主催 田中旭昇、京阪神の精鋭出演で盛会。黒田節一、會員合奏、本能寺、昇玲、絃旭昇、菅公、昇芳、絃旭昇、赤垣源蔵、昇万、絃旭昇、白虎隊、有馬旭誠、荒城月夜の曲、下条旭加、絃旭仙、鉢の木、岸原旭正、堅田落、小林旭、扇、絃旭昇、若き敦盛、丸尾旭宝、大楠公一、小林旭華、絃旭昇、羅生門、田添旭雪、栗津の露、下条旭仙、絃旭昇、旭好、松の廊下、高千穂旭楓、絃旭風、柳の精、樋口旭総、三絃、軒屋一峯、新撰組、山本旭紅、安宅の関、山本旭泉、姫百合の塔、田中旭昇、浜本旭好、五条橋、能勢旭陽、壇の浦、野坂旭樹、二〇三高地、奥村旭美、吉野山懐古、宮垣旭璋、絃旭昇、旭好、立方、伽羅の兜、伊藤旭暢、富樫旭桂、絃旭岡、秋風故郷の山、榎本旭風、絃旭岡、旭璋、立方、未練西行、松岡旭文、大物の浦、田中旭昇、浜本旭好、薩摩の乙女、松岡旭岡

四明会主催 五月二十七日十一時 京 琵琶演奏大会 都東山安井金比羅宮会館、超満員の盛会であった。(別項参照)

筑前 琵琶 六月三日午前十一時 大 青葉会演奏会 阪難波高島屋七階ホール、主催榎本旭風氏。関西地方多数名手の外、舞の藤間良輔、若柳吉由二、若柳朱雀各師、笛、茶道の有名人が賛助共演して極めて盛会裡に終始した。尚司会は朝日放送アナウンサーの西村弘子女史が担当した。猿蟹合戦、山崎、山本通三(目二七ノ一)

首藤 坂崎羽守、高千穂旭楓、絃旭操、旭暢、舞扇鶴ヶ岡、大敷旭寿、天の羽衣、山本旭紅、下条旭仙、絃旭昇、旭操、旭好、立方、若き敦盛、秋元旭晨、竹本旭将、茶道松風、の曲、宮垣旭璋、絃旭操、旭山、旭好、菊水行、橋本旭山、新撰組、梅原旭壽、未練西、伽羅の兜、伊藤旭暢、絃旭操、大物の浦、田中旭昇、浜本旭好、西郷隆盛、矢吹旭美津、秋風故郷の山、榎本旭風、絃旭岡、旭璋、旭好、旭暢、旭操、旭壽、旭山、旭楓、旭璋、立方、四條隆盛、柴田旭堂、絃旭壽、巡礼お鶴、喜多旭修、吉野山懐古、伊藤旭暢、高千穂旭楓、絃旭堂、旭壽、旭晨、旭紅、旭仙、旭寿、旭将、旭好、立方、笛、堅田落、松岡旭岡

京都琵琶協会 六月九日午後一時 六月定例茶話会 京都西加茂に新築の伊吹正陽会長別宅で開催。去る五月十三日の演奏会々計報告と当日の録音テープ鑑賞や、三會員の研究演奏のあと、七月二十三日祇園八坂神社奉納会の具体的協議、九月開催予定の協会創立二十五周年記念大演奏会の相談などをし夕食を共にして八時散会した。(出席者、伊吹、戸倉、戸田、田中、梅原、矢吹、安住、古谷、木村、水内、平井、植村各會員)

奥定天錨(友三郎)氏 京都四明會員の同氏は兼ねて病氣療養中のところ六月四日胃瘡のため逝去された。享年八十七。氏は平素健脚を誇り重量のリックサックを背負って数キロの山野を跋渉し百歳まで生きると豪語していたが惜しくも亡くなられた。謹んで哀悼の意を表し御冥福を祈る。(神戸市生田区山本通三(目二七ノ一))

予告 浅野晴風夏季例会 七月一日(日) 東京杉並区高円寺会館 京都琵琶協会七月茶話会 七月七日(土)午後一時 會員矢吹華水女史宅 第十三回琵琶を楽しむ集い 七月五日(日)午後一時 徳田市立勤習センター 日本琵琶振興会七月例会 七月十二日(日)正午八時 東京新宿洲風会館 祇園八坂神社恒例奉納演奏会 七月二十三日(月)夕六時一十時 同神社拜殿、主催京都琵琶協会

あき 降りみ降らずみのうつつうしい梅雨がまた今年もやって来た☆毎年このころに梅雨期が無くして新緑から梅雨期に苦勞して稲の苗を植えて百姓さんの主食豊饒に精出して下さる☆勝手なことを云ってはいは罰があたろう☆来月は夏季特別号として内容豊富の記事を満載し併せて絃友同好者間の健康を祝し合いたい☆諸物価昂騰の折柄ではあるが京絃は齒をくい☆微意御了承の上精々沢山御申込を御待ち申上げる。

昭和四十八年七月一日発行 (非売品) 編集者 植村 寛 水 発行所 京 絃 社 高槻市津之江北町一の一の二三 電話〇七(八五)六〇五一番

京 絃

絃

第二二九号 京 絃 社

薩摩琵琶の真髓とその今昔感(五)

個性的変化とその事例―守破離の法則― 創造と核の分裂―孫子の兵法「正と奇」―

東京 坂本 錦道

妙寿系の中から徳田善太郎や伴彦四郎の絃聖と称せられる名人が出ていたが、伴系の中から師も一目おいたという木上竹二郎師(大正二年没)が出て、明治中期以後同師の門から数多い高名の弾士が輩出されたが、今茲でその名を列挙するのは省略して、左の弾士に就いて一評を試みてみる(中に現存されている西村師もあり恐縮)。

伴流 能勢雅春―西田長祐 木上竹二郎―吉村岳峻 遠山緑郎―西村善峻

この図表にある西田、吉村、西村の三師はそれぞれ伴流を継承された先生方であるが、その技法、歌唱法を白樂天の「濤陽江」の詩をもって当て嵌めてみると

西田師―切々として私語に似たり 吉村師―大珠小珠玉盤に落つ 西村師―幽咽たる泉流早瀬を下る 三師とも源流は一つである、手数も大体同じ。然しその個性や独創力が発揮されて、余韻

に至る迄全くニュアンスの変わったものが、ありありと現れて来ている。惟うに芸道を論ずる所謂評論家の中には、「模倣は芸術の冒瀆である」と極論するが、これは一概に責める訳にも行かない。なぜかといえば、芸道というのは初歩に於てはその師の物真似と模倣から入るものであるが、そうかと云っていつ迄経っても師の物真似に止っていったのでは、初伝中伝の域を脱することが出来ない。

そこで今度は修練過程を武道に伝えられる「守、破、離」の法則より論を進める。この説は武道や兵法に限定されるべきものでなく、あらゆる芸道に就ても当て嵌まる法則である。守とは―如何なる芸道でもそれを学ばんとする者は、師の言の通り一定の流儀を固く守り、決して他流に目を向けない。云うなれば物真似、模倣時代である。武に於ては誓約血判を要求された。

破とは―その師の処で十分な修業を積み重ね終って始めて他流の研究を始め、その

長短に就て研究をする。云うなればあまたの剣客又は同好者と交流し、技を磨く武者修業時代である。 離とは―自分の師より習得したものを基礎とし、旧師より離れて諸流の長所欠点を見極めて自ら独創の時代に入り、新奇又は巧妙なる技法を創始する。云うなれば個性と創造の発揮される時代である。

第三の離の時代に於ては個性創造の境に達する訳で、芸風全体の中に旧師の香や色がほのかに出ていけば、完璧なるものとなる。斯くの如くにして、今日の言葉で表現すれば核の分裂によって諸芸道の進歩と発展が行われた。武の中興の祖と称される愛洲移香は、足利末期の兵法者で自ら陰流を創始し、その門からは新陰流や柳生新陰流等々が現われ、江戸末期に至って剣の流派は二百五十流にも達している。薩摩琵琶に於ても、正派の中から初代吉水錦翁の帝国派が生れ、これは斯界

にとつて意表外の新傾向で、加えて士風琵琶の真髓を継承して精神教育と号した。その門下から、永田錦心が錦心流を創始し、同師の没後旧師の遺業を守って一本に結集するかに見えたが、同じ錦心流の先生方にして、おのおの個性が違つて持ち味も違つていたのだから、余程の達識の門人の出ぬ限り之を一本に纏めるのは不可能の事で、茲に至つて核の分裂が当然ながら行われ、夫れ夫れの錦心流何々派又は家元、宗家を名乗る方々も出て来

数ある芸道も時世の進展に伴って進歩と変
様を来していることは前にも触れた。われわ
れも決してそれを否定するどころか当然の事
として受けとめるが、之を琵琶にとつてみれ
ば曾って昔の先師達は何か一風変わった、木に
竹を継いだような芸を発表すると、直ちに
「奇矯なもの、聴衆に媚を売るもの」と口汚
く罵った。孫子の兵法の「正と奇」の説を引
用すると、正とは本然とか正統なもので、正
面攻撃のクラシック的なものを昔の先生方は
多分に持つて居られ、正の範囲の中に入る方
々で、奇に就て孫子は必ずしも之を悪玉扱い
にしていな。即ち奇とは不思議とか変化の
意味に解し、奇襲攻撃も亦兵法の中に勝を制
する重要な要素で、この意味を拡大すると森
羅万象が自然の間に變化し、芸道も更に優秀
な創作の所産も、取りも直さず奇の變化と解
されている。但し奇矯的變化は別である。

兎角芸術家は頭が少々狂っているように人
が云う、我々がピカソや岡本太郎の創作品を
観ても一向に合点がいかない、我々が狂って
いて一世紀も時間のズレがあるのか、先方が
一世紀も頭が進んでいるのか。阿々。
(以下次号)

我が道を行く六十五年 (五)

西郷 天風

雲右エ門入道と入道館の名前は忽ち全国に

響き渡り、毎日の入場者も満員の盛況続きと
いう中に、土曜と日曜の書き入れ日が案外振
るわず、其の原因が和強楽堂の琵琶会に客足
を取られるからだ、と云う訳で、寄席芸人達
が一丸となり意外な問題を提起した。

即ち寄席芸人達はその一人々々が遊芸人と
しての鑑札を受け、それぞれの税金を納めて
生業として居り、又興業師は興業の都度所定
の税金を納めて生活を営んで居る。然るに琵
琶師は税金どころか鑑札もなく、亦琵琶会の
方も興業と同様入場者から会費と称する入場
料を取りながら興業税を納めておらぬ。つま
り税金を納めて居る者が、一文の税金も納め
ておらぬ者に客を取られて生活を脅やかされ
るとは理不尽も甚だしいのではないか、と当
局に善処方を要望した。と云うのであった。

当局もこれには歯が立たず、結局琵琶師も
鑑札を受け、琵琶会も興業税を納めなければ
催しはまかりならぬと云う事になったのであ
る。驚いたのは旧派系即ち薩摩本場出身の大
家先登達であった。琵琶人たる者、薩摩琵琶
の名譽にかけても鑑札を受ける事は許さぬ。
との概は四方に飛び、鑑札を受けたとか、受
けようとしているとか噂された某氏の如きは、
小石川砲兵工廠横の暗がりて袋叩きにされた
などと、仲々きびしかった。

斯うしたことも考えて見れば、明治末期か
ら大正の初期頃は、未だ華族、士族、平民の
階級制度が国民感情の中に温存しており、芸
能界にも演劇や音楽を生業とする者は、一般

職業より下賤のものとして侮蔑される傾向に
あったからである。だが琵琶は元来殿上人の
間にもてはやされ、やがて武人の間に拡まっ
た高尚な芸能として一般社会から、寧ろ士氣
を鼓舞し、人心を清める良い芸能として奨励
されていたもの、之を生業とすることを好
まず師匠格にある人でも、殆んど副業の名目
であった。聞く処によると明治初期の琵琶会
には、時の大臣や将官級の馬車が会場前に連
なるのが常だったと云う。まして琵琶を手に
することを誇りとする立場からみれば、下賤
な職業といわるゝ芸人と同様に格下げされる
のを、そのまゝ見逃す筈がない、しかもその
鑑札の名称が「三等遊芸人」である。

忽ち与論は沸騰し、有力者を立て、当局に
抗議した結果、多数の会員を擁する団体が、
その集會に会費を持ち寄る事は当然で何等差
支えなし、ということになり、旧派即ち薩摩
本場系の方は鑑札の必要がない事になったが、
その代り約三百名くらいの会員名簿作製に奔
走の義務を生じた次第だった。

明治時代の政界には薩摩人の有力者が多か
った、故にその庇護の下に薩摩琵琶の鑑札問
題は、多数の同好者の集會と云う名目で解決
を見ることが出来た次第だが、一方新派の人
達は既に遊芸師匠として、喜び勇んで鑑札を
受けてしまった。

いや、そればかりではない、我々旧派琵琶
人との間に斯様な噂が盛んに伝えられた。
卒先して鑑札を受け九永田錦心師始め泉

社を主宰する肥後錦師などは、鑑札を受け
たい者の為にその手続きを代行して呉れると
云うので、全国から続々と依頼者が殺到し、
忽ち数十人の門人を獲得したというのであつ
た。つまりその鑑札には師事した師匠の名を
明記することになっているので、錦心師に代
行を依頼した人の鑑札には、総て師匠永田錦
心と明記される、とあつては急に入門がふえ
るのも当然、茲に錦心流なる一派の基礎は確
立し、続いて牧野錦光の東京派、児島絃風の
中派、或は山田紫絃の玄海琵琶等々新たな流
派の宗家が出現し、盛んに演奏会を催すよう
になった。それも曾って貸席か寺院の広間
以外では許されなかつた琵琶会も、鑑札を持
つ芸人の興業であれば何の遠慮もなく、堂々
と寄席や劇場で開催できるのだから、流行に
のつて関東であれ関西であれ、到る所に琵琶
演奏会が開催され俄かに琵琶熱が昂まったの
であつた。と同時に、それまで新派と旧派に
二分されていた名称が、総て薩摩琵琶とい
う呼び名一本になつて仕舞つた。

元来錦心流や東京派などは、帝国琵琶吉水
錦翁先生の門下出身であつてみれば、帝国琵
琶錦心流とか、帝国琵琶東京派と称すべきで
あるのに、只薩摩琵琶と呼ぶだけでは本場直
系の薩摩琵琶との区別がつかぬというので、
それまで旧派と名乗つていた琵琶は、誰云う
となく正派薩摩琵琶と呼ぶようになり、更に
九州本場出身の人達の間には純正派と称える
人も現れて、仲々賑やかな時代が出現したの

である。

(以下次号)

来る八月一日発行の本紙は例年の通り
夏季特別号とし紙数を増して内容豊富の
記事を満載、併せて暑中交礼号として貴
名を掲載させて頂きたいと存じます。

夏季特別号発行について

遠隔地同好者間の旧交を温ため、且つ
は京絃援助の思召しをも含めて多数御協
賛下されたく、別紙申込用紙に料金を添
え七月十日迄に御申込み願ひ上げます。

明智の三日天下

本能寺の変

辻 旭城



本門法華宗本山本能寺は、応永二十二年
(一四一五)の創建當時は京の五条坊門にあ
つたが、その後転々と移変し天文十四年(一
五四五)には今の本能小学校(中京区六角油
小路)位置に在った。その本能寺が明智光秀
のために焼かれ、天正十五年(一五八七)市
区整理で中京区寺町姉小路上る本能寺前町の
現在のところに移った。

戦国時代で世は麻の如くに乱れた天正十年
六月三日己の上刻(午前十時)、本能寺の変

の悲報が宮津の細川幽斎の城に舞い込んだ。
明智日向守光秀が主君信長を本能寺に襲い
殺害したというのである。

光秀がなぜ信長に謀反したのか。その原因
には色々の説が伝えられるが、天正七年六月、
光秀が丹波八上城の波多野兄弟を降したが、
その罪を軽くするため兄弟を安土城に送つた
ところ、信長は之を許さず磔形にしたので、
波多野家に人質となつていた光秀の母は、波
多野の将兵になぶり殺しにされてしまった。

また伊丹城主荒木村重が猜疑心の強い信長
の誤解を受けて背いたとき、光秀の二女が村
重の嫡子新五郎に嫁いでいる関係から、村重
には切腹を命じたけれども家中の者の命は助
けるといふ信長との約束であつたにも拘らず、
信長は村重の妻子近親者ら百二十余人、召使
い等の女子供三百八十余人、若党家来百數十
人らを四軒の家に押込め、火を放つて焼き殺
し、残つた女性二十人を赤腰巻一枚のはたか
にして荷車に乗せ、京の目抜き街を引廻
したあと、六条河原で首をはねた。その外天
正八年には佐久間信盛を高野山に追放して殺
害するなど、信長の言語同断な残酷ぶりに義
憤をも感じて忍ぶことが出来なかつた。

光秀はもと美濃の土岐氏一族で、一介の浪
人から信長に召出されて最初は三千貫の小祿
であつたが、軍略、政略ともにすぐれ、度々
の戦功によりやがて近江志賀郡で十万石の領
主となり、信長直屬の武將として活躍を続け
て、遂には丹波で三十六万石、近江の一部で

十八万石、合せて五十四万石の大々名にまで出世したが、余りにも強い信長の猜疑心と横暴、残虐ぶりに漸次反感を抱きはじめて、天正八年頃を境に信長との間に深い溝が出来、信長の心は万事如才のない秀吉に移りつゝあつた。従つて光秀は信長への信頼度が日を追つて薄くなり、いつかは信長に代つて天下を取らうと考えるに至つていた。

たまたま徳川家康が信長と交歓のため安土城に到着したので、光秀はその接待役を命ぜられ周到の注意を以て當つたが、いざ当日に至つて不行届きを理由に突然接待役を免ぜられ、中国遠征中の秀吉の応援に出陣を命ぜられた。頭にきた光秀はとうとう勘忍袋の緒が切れ、一時は今あめが下知るさつきかなの一句を残して謀反に踏み切つた。そして近親數十人だけを以て滞在中の本能寺を急襲し、主君信長を火中に自刃せしめた。

六月三日、この悲報に接した宮津城では、藤孝、忠興父子が髪を切り主君の死を悼んで菩提を帯い、藤孝は隠居して幽斎となり細川家を忠興に譲つて「明智殿とは長い間の盟友であるが、この友情も信長公の恩義にはかえられぬ、そなたは、そなたの考え通りの道を歩むよう」と云つた。忠興は主君信長の恩義と、愛妻の玉の父光秀に対する肉親の情に板狭みとなつて苦しんだ。

変後一週間の六月九日に届いた「あなた方御自身の御来援は期待しないが、せめて家臣を繰出して戴きたい」と、細川家からの救援

をひたすらに待つ光秀のあせりが窮われて、そゞろ哀れを感じさせる。本能寺の変は僅か十四日で光秀は退却し、近江に落ち行く途中小栗栖村の長兵衛の竹槍に刺されて敢えない最後を遂げ、やがて世は秀吉の全盛時代を迎えるが、細川家は光秀の招きに応じて秀吉に志を合わせたとして、丹後の光秀の所領まで与えられたと云う。

狂酔亭漫録(第九十一) 赤穂義士の最期(六)

古谷 寛水

引続き久松邸に於ける切腹。第一番には大石主税、第二番には堀部安兵衛と次第に切腹して、第十番大高源吾の番に至り、彼は其場に就き微笑を漏らして左右を顧み、「此処に臨み乍ら一句浮んでおさればお筆を拝借仕りたい」と申出た。直ちに筆を供すれば悠々として鼻紙を取り出し、

梅で呑む茶屋もあるべし死出の山の一句を認め、従容として首を授けた。嗚呼此の度胸、此の風流、其洒落さ想い見る可く俳人子葉の立派な最期であつた。

麻布日ヶ窪の毛利邸に臨まれたのは、御目付鈴木次郎左衛門、御使番齋藤治左衛門の一行であつた。此処も毛利甲斐守、及び子息右京太夫待受けて会釈され、一党を大書院に呼出して御沙汰書を宣告せられれば此処にては

岡島八十右衛門、村松喜兵衛の兩人お受する。其言葉の涼しき、平素の訓練は此辺に見え。一寸目立ったのは、家の定紋付けた幔幕であつた位である。切腹は形の如く岡島八十右衛門から吉田沢右衛門と順序に、第三番目に武林唯七に至つた。彼は端然と其座に就き、三方引寄せ短刀取上げ既に腹に当てる所を、介錯人の柳正右衛門「鋭」と一声、後ろから太刀を振下したが、心臆したか手狂つたか、首の半分まで切込んで打損じたので、唯七は堂と前へ倒れたが、流石は勇士痛手に屈せず其身を起し姿勢を正し「静に御討ちなされ」と声掛けた。正右衛門も氣丈の士、是はと太刀を取直し「承る」と応え乍ら声諸共に打下せば、身首は其儘二つとなつた。検使を始め満場の役人、唯七が最後の隙まで一糸乱れず、従容自若たる態度と、正右衛門が最初に失敗し乍ら其精力を一倍して前敵を取返したのを感嘆された。唯七は文才あり、彼は翌前一絶を賦して之を辞世として遺留した。曰く、

三十年來一夢中 捨生取義幾人同 家郷臥病雙親在 膝下奉飲恨不終 彼の孝情も亦掬す可しだ。斯くて段々介錯を進め、毛利邸に於ける十人の切腹も終つた。三田の水野邸にても、主人監物は御目付久留十左衛門、御使番赤井平右衛門検使の一行を出迎え式場へ誘われた。当家に於ける義徒は壯年揃いで、何れも死を視る事帰するが如く、相追うて切腹を遂げた。以上四ヶ所に於

て義士四十六人一時に悉く刃に伏した。嗚呼天粟を雨降らし鬼夜哭するものあらん乎。一党の希望は何れも同じく、遺言も殆ど一致して居たので、四家は予め打合せ、今夕其遺骸を泉岳寺へと送られた。只見る、此夜義徒の遺骸を納めた棺を載せた駕籠一挺毎に、高張提灯函提灯各一對を先に立て、棒突足輕六、七人之に付添い、騎馬徒歩立の士を合せ、多きは数百、少きも百餘が前後を警固し肅々として各邸の裏門を出た。乃て泉岳寺本堂の縁側には四十六個の白棺は据えられた。大説經、大引導、而る後冷光院殿前少府朝散太夫吹毛玄利大居士の墓側に各々三尺の地を占めた四十六基の土墳は起された。

翌日法事料として、細川越中守より金五十兩、松平隠岐守より銀五十枚、毛利甲斐守より銀二十枚、水野監物より銀二十枚が、夫々泉岳寺へ寄進され、同時に義徒の武器什具も亦悉く同寺に納められた。御処分は既に終り、久松、毛利、水野の三邸、殊に仙石邸までも、一党の坐した畳を悉く新に取替え、甚だしきは襖まで貼替えた。が細川家のみは其事なく依然元の儘にて差置かれる。而も「一党切腹の場処浄めの為に真藏院に命じ祈禱致させ申す可きか」を家臣から申出ると「其儀に及ばぬ」と斥けられた。之は如何なる御意ならんと俗更共が疑うを聞かれ越中守は左右に向い「十七人の勇士は当邸の守護神じゃ、それを抜い浄める法やある」と申された。後に懸念な大名の来せら

れた時にも一党切腹の跡を指差し「あれは我庭の名所でござる」と話された。一党切腹の翌々日、越中守は在府の藩士を悉く上邸に召集し「此度は何れも御預一党の接伴に骨折し近頃苦勞に存する。御処分は権現様以来の御掟に基かれた事と存すれば力に及ばず。兎に角一党揃いも揃うた勇士共、其間に優劣の有るう筈も無けれど、噂にも好々量見して沙汰致すよう」と示諭された。大人は義に曉る。既に大節を全うすれば、小徳は出入して可也、と古聖も言つた。天下後世義徒を品評する者は、越中守に学ぶべきである。

久松邸に於て大高源吾の介錯をした傑物波賀清太夫に就て補遺すると、大高源吾は久松家へ御預以来接伴係の波賀清太夫と親んだが彼の身分は如何にも低い。それを平生氣の毒に思つて居た処、幸に清太夫が源吾の介錯人に當つた。源吾は一策を按じ、切腹の坐に就てから「士の介錯は相当の武士が當るを大法とする。貴殿の御身分は」と問うた。清太夫はハタと行詰つたが彼も英物「御掛念には及びませぬ。拙者藩中にて上士格でござる」と答えたので、源吾は其儘に首を討たせた。此事拾置かれず、清太夫から届出ると、藩の方でも仕方なく、上士の格に昇せたと云う。

然し清太夫は其後久松家を去り、京阪から江戸に出で浪人して兵学を教授し、元文三年八月十六日芝宇田川町の橋居に歿した。噫此一英物遂に松山藩の知る所とならず、太平の天地は空しく稜々の土を埋没したのである。

今春以來六回に亘り義士の最期を報じたが之は明治の篤学福本日南の説によるもので、彼は終生の努力を赤穂事件解明に費し、細川家の堀内覚書を始め幕府記録、後鑑録、赤穂義士伝、久松家日誌、烈士報覽録、赤穂義人録、赤穂義士年鑑等の諸書を参酌したもので最も真実を伝えるものと私は確信します。猶、討入現場より大石の内命を奉じて身を隠した寺坂吉右衛門始め、一党の銘々伝や外伝等未だ未だ記すべき事は多いが、之は他日に譲り、今回は一先づ擲筆する。(此項終)

お知らせ



日本琵琶振興会 会長 鈴木流泉

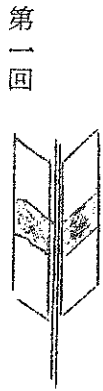
去る五月廿七日、当会主催「故水藤錦樓師を偲ぶ会」の席上、口頭を以て松田静水先生(錦心流琵琶一水会名誉会長・薩摩琵琶連合会々長)に当会の顧問役御引承け頂きたく御願ひ致しました所、翌廿八日、早速御快諾を頂きましたので、お知らせ申し上げます。

当会顧問諸先生のうち、吉水錦翁先生が、目下御病氣引籠り中の時に方り、思いもよらぬ水藤顧問の急逝に遭い、一同云い様のない寂寥感に襲われましたが、其の情沈の氣を癒すべく、新たに松田先生をお迎えできた事は喜びに堪えないところであります。松田先生は私個人にとっては恩師であり、

現在までも、当会主催の月例研究親睦会には身辺御支障の無い限り、必ず御出席くださるで、当会の趣旨等は運営等に就ても宜き理解者であられます故、今後内外共、斯道振興の為に種々御教示頂ける事と、期待致し居る次第です。

昭和四十八年六月一日

以上



第一回 「旭登会」公演より

風薫る 琵琶ばちがえし さつきかな
筑前琵琶旭会の名手若宮旭登師の東京に於ける初の公演会が、五月二十日東京高円寺会館に於て十一時半から開催されたが、以下はその時の「寸評」である。前夜まで気づかわれた天候も当日は快晴に恵まれ、他人ごとながらホッと救われた思い。

まづ会館二階の楽屋を訪ねると、既に大阪から賛助出演のため長駆馳せ参じられた関西琵琶界の大立物松岡旭岡、榊本旭風師を始め、高千穂旭楓、伊藤旭暢らの皆さんが見台を前に、それぞれ絃の調子や発声に余念のないお稽古の最中で、さして広くもない楽屋の隅々まで、ビーンと張りつめた空気が流れていて、会主の若宮師を始め皆さん、まさに出陣前の

一ツ刻：と云った感じである。

その幕明きは若宮さんの東京初公演を祝って、宮内幸さんの祝儀舞踊「寿」に続き野瀬綾子・絃高千穂、伊藤の「秋風故郷山」だが、正直云って若い野瀬さんは歌うのが一杯。今後の精進を期待したい。次が若宮旭英さんの「衣川」。昨秋田中旭嶺会の折に聴いた時から想うと格段の進歩で、流石に旭登師の令息とあって血は争われぬもの、将来が楽しみである。

このあと安田旭富さんの「將軍悲歌」は先づ先づの出来だが、「若き敦盛」の長岡旭玲さんは相変らず豊かな声量と共に好調そのもの。「山吹の里」の樋口旭総、「新撰組」の高千穂旭楓、「羅生門」の戸倉旭嶺、「堅田落」の岡田旭運：そして会主若宮旭登師の「舟弁慶」と、何れもそれぞれの持ち味を生かしての好演奏であった。

ところで、次の錦琵琶水藤五郎師が「勿来の関」の演奏半ば、突然絶句して落涙しはし：そのまゝ客席に断つて舞台を下りてしまったのは、日も同じ二十日とて、その師であり且母堂の亡き錦藤師が、去月二十日舞台で倒れたことに想いを馳せてのこととて、胸中察するに余りあり、止むを得ないこと。伝え聞くところによれば、この日三鷹の市民会館で開催された加藤錦陽師の演奏会に、賛助出演された水藤一門の幹部桜水さんが「曲垣平九郎」の演奏中、これまた故恩師を想い出されて泣き伏してしまつたとか。

綾子、伽羅の兜一辻旭城、栗津の露一石橋旭嶺、由比ヶ浜一太村旭令。外に詩吟二、日舞二、民謡三、狂言一。

員の盛会にて、一曲終了毎に萬雷の拍手は耳を聳し、誠に気持ちの良い演奏会だった。特に浜松小野鶴彦門下、京都平井春嶺門下の次代を背負う方々の真剣な演奏振りは印象的であり、東京、横浜、静岡、京都、大阪等より迎えたゲストの先生方の熱演は大好評であった。しかし会員二名の病欠演は惜しまれた。四明会の会員は高齢者が多いので、折角御自愛下され、次回には全員の演奏を心待ちしたい。当日の演奏番組は次のとおり。

第十回 五月六日昼神戸琵琶を楽しむ集い 中御影区民会館にて開催。本能寺、城山の月、戦艦大和、田中敷水、西郷隆盛、小塩梁水、白虎隊、浅見汀水、小栗栖、番匠落水、湖水乗切、高嶋時水、山科の別れ、大橋戎水、別れの盃、木下皇水、茨木、野尻撰水、詩吟、二嶋帝峰、以上演奏のあと去る四月十五日来神録音された故水藤錦藤師の「耳なし芳一」のテープを黙禱して鑑賞し夕食後番匠氏得意の琵琶民謡などを楽しんで八時過ぎ散会した。尚次回は六月二十四日昼高嶋時水氏宅で開催の予定。

神藤敷水、野田の笛、加藤混水、春望、大西弦水、羅生門、小林残水、井伊大老、阿部勝水、禅海、田中訴水、横笛、土川吟水、松の廊下、森田紅水、録音演奏、故稲葉葵水、曲垣平九郎、村上虎水、桶狭間、水谷浩水、舟弁慶、奥村慧水、新撰組、菅沼響水、本能寺、田中敷水、石童丸、吉野洲水、戦艦大和、中谷襄水、湖水乗切、山口速水、山科の別れ、宮原環水。尚当日菅沼支部長の挨拶に続いて元衆議院議員で支部顧問の辻寛一氏から記念品が、日本芸能顕彰会長鈴木鉦次郎氏から記念トロフィーが支部全員立会拍手裡にそれぞれ未亡人稲葉かねさんに贈呈された。

筑前琵琶 五月二十日昼東京杉並旭登会演奏会 区高円寺会館(別項参照)

ロータークラブ 京都の紳士神商集団例会に琵琶演奏の同クラブ第七七二回例会が五月二十一日京都グランドホテルで盛大に開催され乞いに応じて梅原旭登女史が「衣川」の一曲を演奏、好評であった。

森鶴翁氏入浴 岡山への旅行の帰途京欣迎の夕都に立寄られた静岡森鶴翁氏ご夫妻を迎えて五月二十一日夕四明会の栗本天芳翁並びに京都琵琶協会有志(伊吹、田中、梅原、矢吹、古谷、平井、植村)が平井春嶺氏宅に集り芸談や懐旧談に花を咲かせ附近の料亭「きぬ」で杯を挙げて交歓、楽しい一夕を送った。

日本琵琶振興会 五月二十七日正午、八時東京新宿洲風会館。今回は臨時特別行事として「故水藤錦藤師を

青葉祭り 弘法大師の創建と伝えられ諸芸大会 河内長野市の延命寺大講堂に於て大阪琵琶同好会主催の上記が五月五日市長や名誉職、一山僧侶など多数を迎えて盛大に開催された。当日は晴天に恵まれ緑したたる境内の青葉若葉の間から鶯の鳴声も洩れ三百の一般視聴者を喜ばせた。那須与市、花旭友、城山、矢野旭信、花の白虎隊、多和

故稲葉葵水氏追悼 ありし日の君がいさをし語りつがまし、辻寛一、前水会名古屋支部長稲葉葵水師逝いて二百余日、師の追悼を兼ね五月二十日昼名古屋市中須の中小企業福祉会館ホールに於て大阪、福井、横浜、東京からゲストを迎え名古屋支部春の演奏会が開催された。